

紫芳会だより ～輝く先輩達～

国立大学法人 一橋大学
学長

蓼沼 宏一 氏 (高校30期)

国立市出身。立高30期(1978年卒業)。卒業後、一橋大学経済学部に進み、大学院進学後、アメリカのロチェスター大学に留学して博士号(Ph.D.)を取得。

1990年より、一橋大学経済学部で教鞭をとる。

人々の幸せを高めるための経済システムとはどうあるべきなのか、といったことを考える厚生経済学と社会的選択理論を専攻している。

著書に、『幸せのための経済学——効率と衡平の考え方』(岩波ジュニア新書: 知の航海シリーズ、2011年刊)などがある。

2014年12月に一橋大学長に就任。



紅葉の美しい
一橋大学キャンパス



立高生の皆さん、こんにちは。高校30期の蓼沼宏一です。

立高時代の私は、多くの同級生と同様、合唱祭だ、体育祭だ、文化祭だと、一年中、行事に明け暮れる日々でした。2年生のとき、文化祭のクラス展示のチーフを務め、「受験産業の実態」なるテーマで予備校などに突撃取材に行ったのは良い思い出です。でも、数学や歴史などで面白い先生も多く、勉強もしましたよ。1年生のときの数学の家弓先生は、高校のレベルをはるかに超える授業をされていて、大学に入ってから受けた数学の講義で同じ内容が出てきたので、立高のときに散々苦労したのは当たり前なのだと納得したものです。

立高を卒業して、一橋大学経済学部に進学し、大学院に進んでアメリカのロチェスター大学に留学後、一橋大学に戻って経済学を教えてきました。そして、この12月より、一橋大学の学長に就任いたしました。いま、**たくさんの立高生に一橋大学に来てもらいたい**と強く願っています。

実は、私と一橋大学とのかかわりは、子どもの頃まで遡ります。私の父は一橋大学法学部で労働法を専門とする教授でした。父はよく自宅にゼミの学生を招き、議論と懇親の時間を持っていたものです。私もそんな学生さんたちから面白い話を聞かせてもらうなかで、一橋の教育の良さを肌で感じていました。やがて一橋は自分も学生として学んでみたい大学の第一になっていきました。

とはいえ、父親と大学でも顔を合わせるのには抵抗があり、父とは違う経済学部を選ぶことにしました。もちろん、経済学が面白そうだと興味湧いていたこともあります。ところが、受験間際の高校3年の12月、困ったことが起こりました。父が学長に就任したのです。父が学長では何かと気まぐれに決まっている・・・しかし、今さらほかの大学を受験することなどできませんでした。共通一次試験導入前の当時の入試は大学ごとに全く違うものになっていて、私は一橋大学用の受験勉強しかしていなかったのです。現役生の皆さんは、そのときの私の気持ちが分かりますよね。それでも落ち着いて考え、やはり好きで入りたいと願っていた一橋大学に進もうと決心しました。

入学して、やはり良かったと思いました。**一橋大学は自由な学風で、何を学ぶかを学生自身が自由に決めることができました**。私も小平や国立の大学図書館で、自分の興味のままにいろいろな本を読みあさりました。また体育会ホッケー部に入部し、スポーツにも打ち込みました。

とりわけ面白かったのは、3年生からのゼミでした。私は石弘光先生の財政学・公共経済学のゼミに入りましたが、石先生はとても厳しい方でした。遅刻はもつてのほか、予習をせずに行けば厳しい質問を受けて居たたまれない状況に陥るので、学生同士が自然と規律をもって勉強に取り組むようになりました。半面、石先生は学生をととても大切に扱ってくださいました。スポーツマンの先生は、夏は登山、冬はスキーにゼミ生を連れて行ってくださったものです。石先生は、社会性を身につける人格教育をしてくださったのだと思います。

私も長年、一橋大学でゼミを持ち、20回以上、卒業生を送り出してきました。その経験から感じるのは、**大学に入ってから伸びる学生は、受験勉強だけしてきた人よりも、高校で何かに打ち込んできた人の方が多い**ということです。立高生の皆さんには、高校時代に何かに一所懸命に取り組むこと、そして勉強面でも高校で身につけるべきことをしっかり学んだ上で受験勉強に臨むことを期待しています。立高は、それを可能にする機会に溢れた学校だと思えます。もう一つ期待したいのは、ぜひ、**海外に出て行って自分の得意分野で真剣勝負してほしい**ということです。私も、ロチェスター大学の博士課程での5年間は、勉強も大変でしたが、外国で、生活費ギリギリの奨学金で自炊生活をしたことで、いろいろな面で鍛えられたと思えます。どんな分野でも、どんな方法でも構わないと思えます。**世界に羽ばたいてほしい**と願っています。



著書
『幸せのための経済学』